成瀬巳喜男のファンダメンタルズと疑問とその解明（3）

2. 成瀬巳喜男は何故松竹を去ったのか？

松竹蒲田撮影所に十五歳で小道具係として入り、22本のサイレント映画を監督し、先に述べた「謹賀新年」なる珍妙なる作品で初めてトーキー作品を監督した翌1934年にトーキー第二作目の「限りなく鋪道」を監督した後、成瀬巳喜男はP.C.L.へと移ります。この作品も他の監督たちが敬遠したもので、「一番末席の僕のところに廻ってきたもの」と成瀬巳喜男自らが語っています。これを撮れば、好きな作品を撮らせてやるということで、成瀬巳喜男は次回作の構想を練り始めます。それが後年、成功を収める林芙美子の原作のものでした。結局は林芙美子の原作を松竹で撮ることなく去ります。そして、そのことについて佐藤忠男の見解と成瀬本人の語ったところを並べてみることにしましょう。

佐藤忠男説	成瀬巳喜男本人の弁
成瀬巳喜男には学歴がなかった。そして城戸四郎という所長は東大出の最初のプロデューサーだったのでエリート意識があった。学歴のない、大人しい人というのを何か無視しているようなところがあって、才気があってどんどん発言する人はどんどん監督に起用していったけれども、成瀬巳喜男はなかなか監督に起用されなかった。池田義信（注1）が自分の助手にしてくれて、そして、なかなか監督になれないのでやめようと思ったら、五所平之助（注2）が慰めてくれて、自分より若い人の助手をするのが嫌だったら、私のところに客員のような形でいてくれたらいいと優しくされた。 ＊城戸に「松竹に小津は二人いらない」と言われたという本当か嘘だか分からない話もありますが、1930年に監督第一作を撮りますが、これは城戸に指示され36時間で撮り上げたと語っています。	「P.C.L.（注3）から成瀬を貰いたいと城戸さんに言ってきたわけです。尤も一年ほど前『夜ごとの夢』の頃にも話はあったのですが。ともかく城戸さんは一本作ってから、と言って許さないのです。月九十五円で生活に困っているでしょう、城戸さんとも会って話したのですが、困るなら俺のところへ貰いに来い、という工合なのですよ。でも松竹を出たのは経済的な理由じゃなかった。第一にはここで一つ外に出ようという気持ち- 僕は元来の出不精ですからね。第二は、そろそろトーキーの時代でしょう。松竹だと何しろ末席だからいつ撮らしてくれるかわからないのですよ。それで移ることにしました。松竹とP.C.L.との印象ですか？そう、松竹は撮らしてやる、P.C.L.は撮ってください、その違いはあったのじゃないかしら」

（注1）池田義信（1892~1973）1921年に松竹蒲田撮影所で監督昇進。主にサイレントの時代に活躍した映画監督で、1936年に映画監督を引退。松竹の管理職として、大船撮影所製作・企画部部長等を歴任。その後は、映画製作者連合会事務局長、映画倫理規定委員会（旧映倫）副委員長を務めます。夫人はかつての松竹の大女優であった栗島すみ子（1902~1987）で、1935年小津安二郎「淑女は何を忘れたか」を最後に映画界を引退。1956年成瀬巳喜男「流れる」に特別出演、成瀬からのたっての願いで実現したものでした。

（注2）五所平之助（1902~1969 ） 1923年に松竹蒲田撮影所に入社。同年に小津安二郎も入社。島津保次郎に師事した後、1925年に監督デヴュウ、城戸四郎の指揮の下に島津、牛原虚彦らと並んで蒲田調を確立したと言われます。1931年には日本映画最初のトーキー「マダムと女房」を発表。五所作品の中では「煙突の見える場所」（1953 新東宝）「恐山の女」（1965 松竹）が印象に強く残ります。

（注3）P.C.L.　P.C.L. は、「フォト・ケミカル・ラボラトリー」の略で、1933年に設立された映画製作会社です。トーキーの撮影。録音用の貸しスタジオとラボ（現像所）を持つ写真化学研究所の子会社として設立され、先駆的なトーキー作品を製作したと言われます。その後、東宝の東京撮影所となります。

現在と社会状況を始め、学校制度自体が大きく異なる時代のため、学歴の有無についての議論をここでは行いませんが、それぞれがこの時代をどう生きていったのか、また生きていく中で何を感じ、考えたのかをあくまで想像の領域で考えることができるかもしれません。現実的にどういった道筋を通って映画監督に辿り着いたかを見てみましょう。

監督名	最終学歴	映画監督になるまで
島津保次郎	正則英語学校 （現正則学園高校 千代田区）	卒業後、小山内薫の主宰するキネマ俳優学校（のちキネマ研究所）に入門
五所平之助	慶應義塾商工学校卒業 （現慶應義塾中等部）	歩兵第一連隊へ志願入隊し見習士官に
小津安二郎	三重県立第四中学校卒業 （現宇治山田高校）	神戸高等商業学校（神戸大の前身）名古屋高等商業学校（名古屋大の前身）いずれも落第
溝口健二	私塾の田川学校入学後石浜小学校（台東区）へ転入	中学進学を希望するも父の反対で叶わず
黒澤明	京華中学校 （現京華中学高等学校 文京区）	東京美術学校（東京芸大の前身）の入試に失敗し私立の川端画学校、造形美術研究所に通う
成瀬巳喜男	鮫ヶ島尋常小学校卒業後、工手学校に進むが中退（工手学校は工学院大学の前身）	父死去で家計逼迫のため中退し、松竹蒲田の小道具係として入社（十五歳） ＊工手とは技師と職工の中間の技術者で、この工手養成のための学校
清水宏	北海道帝国大学中退	中退後は有島武郎の玄関番に

一方、城戸四郎はというと

	最終学歴	備考
城戸四郎 (1894~1977)	府立一高 → 東京帝国大学法学部	・築地精養軒経営者の四男 ・東大卒業後、国際信託銀行（現みずほ銀行）を経て1921年に松竹キネマ合名会社入社、1924年に蒲田撮影所所長に ・1946年副社長、1954年社長、1971年から会長

＊現在でも「城戸賞」というのがあり、これは1974年に制定された城戸四郎の「これからの日本映画の進行には、脚本の受け持つ責任が極めて大きい」という持論に基づいた賞で、プロのシナリオライターになるための登竜門となっています。

清水宏、五所平之助、齋藤寅次郎、小津安二郎と年齢こそ成瀬巳喜男よりわずかに上であるものの、後から入社してきた連中が三、四年で監督昇進を果たす中で、成瀬巳喜男は十年という助監督生活を送ります。清水晶は、「生来、無口で孤独と忍従の中に生き、言うべきことも言えない遠慮がちな成瀬は、明朗闊達な青年撮影所長城戸四郎の下で貧乏くじを引いた形だった」と言います。「孤独と忍従」そして「貧乏」は成瀬巳喜男を理解するための、一つのコンセプトになるのではないかと感じられるのです。